

執筆者・あとがき

時代が変わってきています。——より高度で複雑な最新医療を、高齢でフレイルな患者層に、安価で安全に提供しなければならない時代に。私の初期研修時代の指導医の言葉を拝借すると、「うまい、早い、安い」医術が必要なのです。それもファーストフードよりもはるかに高いクオリティで。時間もお金も無駄にしている余裕はありません。外来も病棟も一緒にやる余裕はないくらい病棟管理の分野は急速に進んできました。

こうした事情から、ホスピタリストが生まれたのは必然といえます。

ホスピタリストは、master diagnostician であり、会話を患者を癒せる内科の技をもちながらも、病院や国の変革を牽引する重要職としてアメリカで地位を築いてきました。医師だけでは改革できるスピードと範囲に限界があることも理解したうえで、変革チームをつくり引っ張ってきたのです。

多職種連携のコツも、品質改善 (quality improvement) も、実地臨床業務の背景にある歴史や理由づけも、高齢者ケアの奥深さも、終末期にどう寄り添うかも、日本の医学部では教わりませんでした。しかし、そういつてはられない時代になってきたのです。ホスピタリストが常に質の高い医療を提供するトップランナーで居続け、そこに医学生も研修医も師事することが今後の理想と、私は考えています。

今回私が担当した章 (6~12章) はいずれもホスピタリストにとって欠かすことのできない分野でした。理屈っぽいと思われる部分もあったかもしれませんが、hospital medicine の奥深さと面白さをお伝えしたい一心で書き上げました。つつい何にも考えないで日常的にしていることも、1つひとつ丁寧に考えることで無駄がみえてきます。無駄を省くことで質が高くなります。さらにその質の高さを対外的に示す努力も必要になってきます。ホスピタリストの仕事といわれ

ても、どこから手をつけたらいいのか分からない、そんな方に本書が役に立つことを祈るばかりです。

ホスピタリストはこれからも未来を見据えて行動をしていかねばなりません。国民が健康的な生活習慣を維持し、慢性疾患や難病は治癒され、治療は遺伝子情報を元にテーラーメイドされ、幹細胞が当たり前の技術となり、医療を受けるのに貯金を心配する必要がなくなり、最新のデジタル技術が迅速な診断とシームレスな情報共有を可能とし、医師がもっと多くの時間を患者と過ごしながらかも、ワークライフバランスを維持できる時代が来るまで、私はホスピタリストとして実臨床と教育に頑張り続けたいと思います。

最後に、本書の企画を持ちかけていただいた反田篤志先生と、遠隔地にもかかわらず丁寧に導いていただいた丸善出版 (株) 企画編集部の程田靖弘氏にこの場を借りてお礼を申し上げます。

2018年1月吉日

共著 野木 真将